

KOREMITE

考古学

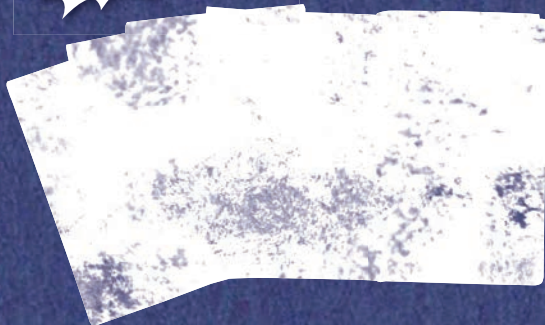
歴史学

民俗学

展示

— 東北学院大学博物館 収蔵資料図録 — **VOL.2**

江戸時代の
“健康” バイブル!



家臣が最も
大事にした書状



絵馬なのに
ムカデ!?



仙台領内のまつりを
知るならこの一冊



ごあいさつ

東北学院大学博物館は平成21年(2009)秋に開館した大学博物館です。大学の研究成果を社会にお伝えするとともに、博物館学芸員資格課程の実習の場として活動を続けています。一方、大学院生には学芸研究員制度を設け、雇用された大学院生は展示作成、展示解説、資料整理などの実務にあたっています。こうした教育活動によって、学芸員としての経験と実績を積んだ学生・院生から、毎年1、2名の博物館学芸員、教育委員会の文化財担当職員を輩出しています。

本書は当館の収蔵品の解説書です。いわゆる収蔵品図録は、一般的には資料そのものの物質的な情報に加え、その資料の全体像を示す資料写真で構成される淡々としたものです。それに対し、本書の意図するところは「読んで楽しい収蔵品図録」、そして「学生の視点で作る収蔵品の解説書」です。掲載する資料の写真は、学内実習の博物館実習生が撮影し、見どころや解説文は、学芸研究員の大学院生と博物館実務実習の学部生が執筆しています。大学院生は、客観的な解説に加え、その資料に対してこだわりをもって紹介したい部分、いわば主観的な解説も加味しながら見所紹介をしています。大学博物館で学ぶ学生・院生の共同作業による図録作成は、実習の成果をかたちにするものであり、専門的な内容をわかりやすく解説するものとなると考えています。

今回の図録では、史料および歴史資料として「伊達吉村領知朱印状」・「明堂図」、典籍として「貝原養生訓」・「仙府年中往来」・「伊達秘録写本」・「模様美術便覧」、美術史料として「鷲図(伊達宗村画)」・「鍾馗様」・「唐美人之図」・「千紫萬紅」、民俗資料として「福應寺毘沙門堂奉納養蚕信仰絵馬」を掲載しました。館蔵資料を広く知っていただくために、今後は毎年一冊ずつこうした図録を作成し、文化財に親しんでいただくための展示を学生たちとともに企画していきたいと考えています。

東北学院大学博物館

東北学院大学博物館の紹介



東北学院大学博物館は、本学土樋キャンパスに隣接し、仙台中心部の愛宕上杉通りに面して建つ大学博物館で、平成21年(2009)秋に開館しました。大学は研究をするために様々な資料を保有しております。しかし、それらが市民の目にふれる機会はあまりありません。当館は、それらの知的財産を一般に公開する役割を果しています。

大学博物館の最大の責務は、最先端の研究と市民とを橋渡しすることにあります。当館が当面对象とする分野は歴史学・考古学・民俗学で、貴重な文献や考古・民俗資料を数多く展示しています。例えば、古代の遺跡から発掘された石器や土器、中世の人々が願いを刻んで仏に捧げた石碑、江戸時代の武家が残した文書、前近代に庶民が生活に用いた日用品、病氣平癒のまじないに使われた道具などです。

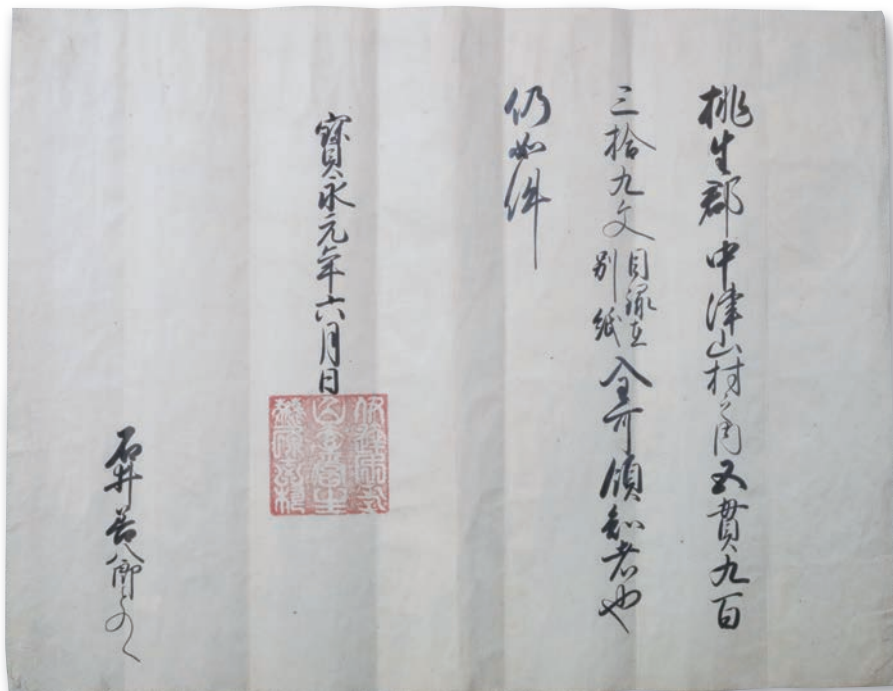
展示は、半年から2年ごとに順次展示替えされていきます。

開館時間	午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休館日	日曜日、祝日・休日、大学の定める休業日
入館料	一般200円(減免措置有り)
問い合わせ先	住所：〒980-8511 宮城県仙台市青葉区土樋一丁目3-1 TEL：022-264-6920 FAX：022-264-6917

※本書の監修は加藤幸治(文学部歴史学科教授)が、編集は熊谷明希(大学院文学研究科アジア文化史専攻博士後期課程)、鈴木春菜・真柄侑(同博士前期課程)が担当した。資料写真は、2016年度博物館実習(学内実習)履修の文学部3・4年生が撮影した。

基本情報 ■発給者：伊達吉村(1680~1751) ■年代：宝永元年(1704)

■寸法：縦35.0cm 横45.0cm



藩士にとって最も重要な書状

土地を支給する際に出された書状

本資料は、宝永元年(1704)6月に仙台藩5代藩主伊達吉村(だてよしむら)が家臣の石井善八郎に発給した知行宛行状(ちぎょうあてがいじょう)である。本文には「**桃生郡中津山村**之内五貫九百三十九文^{目録}全可領知者也/仍如件」と記載されている。つまり、家臣の石井善八郎は、桃生郡中津山村(現在の石巻市桃生町)のうち5貫939文の領地を与えられたことが分かる。

知行宛行状について

知行宛行状は藩主から家臣に対して、土地を与える際に発給された書状である。藩主の代替わりに出された。この藩主の代替わりを契機とした知行宛行状の一斉発給は、前藩主の知行宛行の再確認と新藩主の就任儀礼の一部となっていた。ちなみに吉村が5代藩主になったのは前年の元禄16年(1703)である。吉村の代の知行宛行状は本資料と同じく宝永元年(1704)に一斉に発給されている。また、本資料に書かれている「目録」というのは知行目録(ちぎょうもくろく)を指す。知行目録は知行宛行状と同時に発された知行地の目録で、仙台藩の場合は奉行から家臣に発給された。

ちなみに『KOREMITE』VOL.1で掲載した「伊達綱村領知朱印状」は4代藩主綱村から本資料の石井善八郎の親甚右衛門に宛てられた知行宛行状であり、同じく桃生郡中津山村のうち5貫939文の領地を与えられている。

なお、石井の名前は書状で最も低い位置に書かれている。これは藩主の吉村から家臣の石井に宛てて送っているためであり、主従関係を明確に示している。

伊達吉村とは

伊達吉村は一門宮床伊達氏の祖である伊達宗房の長子として、延宝8年(1680)黒川郡宮床で生まれた。はじめ村房と称す。元禄8年(1695)12月に男子に恵まれなかった4代藩主綱村が養子として迎え嗣子とした。元禄9年(1696)に17歳で元服し、將軍徳川綱吉の一字を拝領して吉村と改める。元禄16年(1703)に24歳で襲封して陸奥守に任じられ、宝永元年(1704)に初めて仙台に入部した。寛保3年(1743)に64歳で隠居し、宝暦元年(1751)に72歳で死去する。

吉村の性格について、綱村は性格的にも物事を深く考え思慮深く、政治に対する取り組みも人並みに優れており、仁愛をもって人に接しうる人柄であると評価している。その一方で、理詰めで考えすぎるところがあり、ともすると理屈に過ぎることが欠点だとも指摘している。

吉村は40年間藩主の座にあり、歴代藩主の中で最も在任期間が長かった。軍役整備や職制改革を行ったほか、農民の規範となる「百姓条目」を定め、役人へも綱紀肅正(こうきしゆくせい)の指示を出した。また、儉約令や江戸への廻米、鑄銭事業で財政を好転させたことから、仙台藩中興の英主とも称えられている。さらに吉村は和歌や書道・絵画・能に優れた教養人でもあった。

学芸研究員 鈴木 春菜
実習生 平原あかり

参考文献

仙台市史編さん委員会編『仙台市史 通史編3 近世1』仙台市 2001
仙台市史編さん委員会編『仙台市史 通史編4 近世2』仙台市 2003
宮城縣史編纂委員会編『宮城縣史2(近世史)』宮城縣史刊行会 1966
本多俊彦『仙台藩知行宛行状について』(『東京大学経済学部資料室年報』(3) 42-55 東京大学経済学部資料室 2013)
作並清亮編『伊達器承』(『仙台叢書第一巻』)31-45 仙台叢書刊行会 1922
仙台郷土研究会編『仙台藩歴史用語辞典』仙台郷土研究会 2015
平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系 第4巻 宮城県の地名』平凡社 1987

用語解説 | 詳しくはP26へ

*1 桃生郡中津山村

この資料のココがすごい!!

藩主から家臣へ土地を与える際に出された知行宛行状は重要な書状であり、丈夫な紙が使用されました。火事の際は焼失を防ぐために井戸に投げ込むこともありました。書状は水に溶けることもなく無事だったといえます。

お気に入りポイント

『KOREMITE』VOL.1では本資料宛名の石井善八郎の親甚右衛門宛の「伊達綱村領知朱印状」を紹介しています。ぜひ4代藩主綱村の朱印と5代藩主吉村の朱印を見比べてみてください。

学芸研究員の目

仙台藩5代藩主伊達吉村は、藩主になった翌年である宝永元年(1704)に知行宛行状を一斉発給しました。本資料はその知行宛行状のうちの一通です。



学芸研究員
鈴木 春菜

■基本情報 ■作者：貝原益軒(1630~1714) ■年代：正徳2年(1712)

■寸法：縦22.4cm 横16cm 厚さ1.2cm



いつの世も求められる「生き方指南書」

養生訓の構成

貝原益軒は、『養生訓』のなかで、「流水は腐らず、戸ばそは錆ず」という中国の格言を紹介している。流水も、戸の蝶番も、動いている間は健全であるが、水の移動が少ない池などの水は腐り、主を失った家屋の戸は錆ついて開かなくなってしまう…。貝原益軒は、こうしたものを現実の生活に当てはめて考えさせながら「養生」という思想と身体観について解説している。養生訓は、このように病気をいかに避けるかを、いかなる人生を送るかや、どのように自然との関係や社会との関係を結んでいくかという問題に転換しながら、読者にさまざまな投げかけをする。ここに養生訓が長く読み継がれてきた理由を垣間見ることができよう。

養生訓は以下のような構成となっている。

- 第一巻 総論上(「養生」の目的やその基本的な考え方について、儒教的な価値に基づいて説明)
- 第二巻 総論下(栄養を取ることや体を動かすことなど、「養生」のために必要な身体的なことについて説明)。
- 第三巻 飲食上/第四巻 飲食下(食べ過ぎがいかに体にとって害かを説明)。
- 第五巻 五官(耳・目・口・鼻・形のはたらきについて説明)。
- 第六巻 慎病(「養生」のためにすべきこと、医師との関わり方について説明)

- 第七巻 用薬(漢方薬の効能等について説明)
- 第八巻 養老(老年の過ごし方について説明)

養生訓リバイバル

近年、江戸の学問や科学、とくに医術や思想、武道といった心身にかかわるものへの関心が高まっている。そうしたなか、「医は仁術なり」(第六巻)と説く本書は、「生き方指南」の定番としてよく紹介される。

これは今に始まったことではない。例えば大正時代から昭和初期にも、『養生訓』は身体と精神を調和した形で結び、人生をより良く生きるための教科書として再評価された。昭和中期にも『養生訓』ブームがあり、近年も『養生訓』リバイバルの様相がみられる。食欲、色欲、過度な睡眠欲、おしゃべりの欲の戒め、寒暖の変化への対応や口腔衛生などの健康管理、夫婦和合や旅行の奨めなど、わかりやすい言葉で語りかける『養生訓』は、時代を超えて日本人の心に訴えるものがあるようである。

学芸員 加藤 幸治

学芸員の目



学芸員
加藤 幸治

儒学者の貝原益軒によって書かれた健康な身体と健康法についての指南書です。病を知ることは健康を知ることでもあり、健康に生きるのは何のためかといった、精神の「養生」を説くところがこの本の真骨頂。いつの時代も愛されてきました。

この資料のココがすごい!

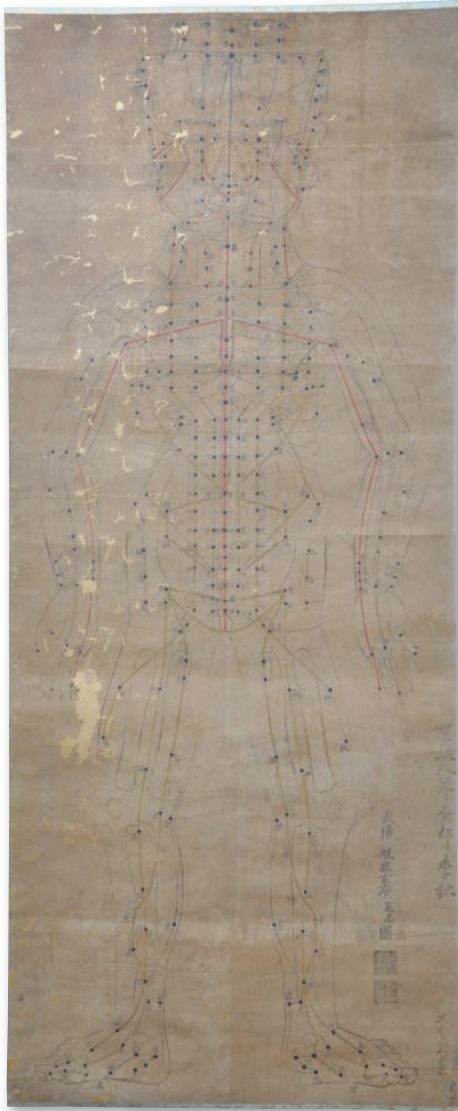
健康になるためには生活を律すべしと説いているところ!

お気に入りポイント

挿絵などほとんどない書物ですが、論ずような文体の「生き方指南」です。

基本情報 ■作者：服部玄廣(生没年不詳) ■年代：享保8年(1723)

■寸法：(軸装)縦187cm 横65cm (本紙)縦124cm 横51cm



この資料のココがすごい!!

江戸時代の漢方医学の身体観に
ふれることができる!

お気に入りポイント

人体の内面を描いた木版を、軸装
して大切に使ってきたことがうか
がわれます。



学芸員
加藤 幸治

学芸員の目

江戸時代は、中国や西洋からさまざまな医術の知識と技術がもたらされ、普及した時代です。そのなかで、人体を描いた「明堂図」や立体模型の「銅人形」がつけられました。人体は人間にとって未知の小宇宙です。明堂とはまさにマイクロコスモスを指す言葉で、医術の教育や施術の実践に使われたものです。



人体は小宇宙

明堂とは

明堂という言葉は、中国古代に帝王がそこで政教を明らかにしたとされる伝説上の建物のことをさす。政治、儀礼、祭祀、教育といった、国家の重要な行事はすべてそこで行われていたのであり、環境と人間の調和を図る重要なポイントであった。このような意味から転じて、星座の名前、人間のつぼの部位などを記した明堂図、道教では体内にある宮殿の名前に派生した。

明堂図とは、中国医学で人体のつぼの位置や経絡(人間の気や血の通り道)を示した図のことである。つぼは人間の体の内側と外側の接点に当たり、体内の病気を治療する場となっている。中国医学において大地と身体が同じ生命体であると認識されていたことが、この明堂図に表れている。明堂図には、人を仰向けにした状態の正人明堂図、うつ伏せにした状態の伏人明堂図、人体を横から見た側人明堂図がある。

日本で独自に発展した漢方医学

日本の漢方医学は、中国の中医学、朝鮮半島の韓医学の知識をとりこみながら発展してきた独自の医学である。人のからだを「気・血・津液」という3種類のエネルギーを運ぶものが体内に流れていると考え、その流れのことを経絡、分岐したり合流したりする場所を経穴とよぶ。そうしたものの流れを良くすれば、心も体も健康がたもたれると考えるのである。

医師は患者の体の状態の触診や生活習慣などの聞き取りによって、「証」という診断を下す。そしてそれをもとに鍼灸や、自然の動植物からとれる生薬を混ぜてつくった漢方薬によっ

て、健康な体に近づけていくのである。

明堂図にえがかれているのは、経絡と経穴(人間の気や血の通り道)である。経穴はいわゆるツボであるが、それは人間の身体の内側と外側をつなぐもので、ここから体内の病気を治療できると考えられてきた。

平面の明堂図と立体の銅人形

本資料は、紙に木版で人体を刷り込み、そこに朱で書き込みをしているものであり、当然のことながら平面で表現された人体図である。これに対し、立体の人体模型に経絡と経穴を表したものを銅人形と呼ぶ。多くは木製または張子による紙製であり、現在鍼灸学校等で用いられているものも樹脂製である。にもかかわらず、こうした人形を銅人形と呼ぶのは、初期の教材が銅を素材として高度な工芸技術を用いて製作されたからである。明堂図も銅人形も、ともに漢方医学の教育や知識の普及に用いられたものである。明堂図は、銅人形図と表現される場合もあるが、これはやはり立体のほうが人体をイメージしやすいからであろう。

銅人形は、経穴・経絡のみならず模造した五臓六腑や骨格も付属する。当時の人体に対する知識の粋を極めたものであった。高度な知識を詰め込んだ立体の教科書である銅人形は、高度な工芸技術をもって精巧に製作される必要があった。そして、こうしたものを製作することは、為政者の威信をかけたものでもあったと考えられる。

学芸員 加藤 幸治

■基本情報 ■発給者：伊達吉村(1680～1751) ■年代：享保8年(1723)

■寸法：(本紙)縦35.4cm 横47cm (封筒)縦36.6cm 横8.1cm (収納時) 縦46.2cm 横33cm (開封時)



藩士にとって最も重要な書状

家臣に新地を与える際に出された知行宛行状

本資料は享保8年(1723)11月25日に仙台藩5代藩主伊達吉村(だてよしむら)から家臣の奈良坂半四郎に出された知行宛行状(ちぎょうあてがいじょう)である。本文には「桃生郡深谷大曲村之内除屋敷_正/竿入代三百八拾四文_正新知行之所/全可収納者也」と記載されている。つまり、奈良坂半四郎は桃生郡深谷大曲村のうち除屋敷(のぞきやしき。藩の租税が免除された屋敷地)へ新地384文を与えられたことが分かる。

知行宛行状は藩主から家臣へ土地を与える際に出された書状であり、藩主の代替わりに一斉発給された。しかし、本資料のように新地や加増等の個別発給も行われたのである。知行宛行状は地方知行制(じかたちぎょうせい)を採用している仙台藩の藩士にとって重要な書状だった。

桃生郡深谷大曲村について

桃生郡は現在の東松島市(旧鳴瀬町・矢本町)と石巻市の一部(旧河南町・河北町・桃生町・北上町・雄勝町)からなる地域である。桃生郡は近世期に河川改修や用水沼の築造により大規模に開墾され、石高が飛躍的に伸びた。また、桃生郡の南方にある深谷は北方郡奉行の管轄下にあった。

大曲村は現在の東松島市大曲(旧矢本町大曲)にあたる地域である。「安永風土記」に付記された文政11年(1828)の書付によると、村名は玉造川(現在の定川)が5カ所曲がっていたことが由来だという。また、「正保郷帳」によれば田2貫706文・畑527文で早損と注記があり、ほかに新田42貫637文と記載されている。

仙台藩中興の英主

本資料を発給した伊達吉村は延宝8年

(1680)に黒川郡宮床で誕生した。実父は伊達宗房(宗房は2代藩主忠宗の子)である。元禄8年(1695)12月に4代藩主綱村が養子として迎え嗣子とした。はじめ村房と称すが、元服後には將軍徳川綱吉の一字を拝領して吉村と改めた。元禄16年(1703)に24歳で襲封して陸奥守に任じられ、宝永元年(1704)に初めて仙台に内部する。その後寛保3年(1743)に隠居するまでの約40年にも及ぶ治世の中で一貫して藩政改革を推進した。享保4年(1719)には農民の規範として17カ条からなる「百姓条目」を制定した。その一方で役人への綱紀肅正(こうしきゆくせい)も指示している。例えば村の治安や風俗を取り締まる村横目(むらよこめ)に対しては職務怠慢を指摘したほか、賄賂を受け取る役人が後を絶たないことにふれ、摘発するよう指示した。また、倭約令や江戸への廻米・鑄銭事業により財政難の克服に成功している。さらに産馬や植林の奨励・鉱物資源の開発など殖産興業にも取り組んだ。ほかにも刑法の整備充実や、養賢堂の前身である学問所の建設など文治政治も推進している。以上のことから伊達吉村は仙台藩中興の英主と呼ばれる。

学芸研究員 鈴木 春菜
実習生 木村 茂行

参考文献

仙台市史編さん委員会編「仙台市史 通史編3 近世1」仙台市 2001
仙台市史編さん委員会編「仙台市史 通史編4 近世2」仙台市 2003
宮城縣史編纂委員会編「宮城縣史2(近世史)」宮城縣史刊行会 1966
本多俊彦「仙台藩知行宛行状について」(『東京大学経済学部資料室年報』(3) 42-55 東京大学経済学部資料室 2013)
作並清亮編「伊達畧系」(『仙台叢書第一巻』31-45 仙台叢書刊行会 1922)
仙台郷土研究会編「仙台藩歴史用語辞典」仙台郷土研究会 2015
坂田啓「私本 仙台藩士事典(増訂版)」2001
仙台郷土研究会「仙台藩歴史事典一改訂版一」2012
平凡社地方資料センター編「日本歴史地名大系 第4巻 宮城県の地名」平凡社 1987

用語解説 詳しくはP26へ

*1 地方知行制

この資料のココがすごい!!

仙台藩では知行宛行状は藩主の代替わりに一斉に発給されましたが、本資料は奈良坂へ新地を宛がうために個別に出されています。

お気に入りポイント

朱印が押された文書を朱印状と言います。本資料は吉村の名が刻まれた朱印が使われています。

学芸研究員の目



学芸研究員
鈴木 春菜

本資料の最後には「奈良坂半四郎とのへ」と書かれています。よってこの書状は奈良坂に宛てられたものだと分かります。宛名が書状の一番下に書いてあるのは、藩主から家臣に出された書状であるためです。宛名の位置で主従関係が示されています。

基本情報 ■作者：伊達宗村(1718~1756) ■時代：江戸時代

■寸法：縦41.2cm 横53cm



シンプルな美

伊達の芸術

本作品は、仙台藩6代藩主伊達宗村(だてむねむら)によって描かれた絵であると考えられる。描かれているのは白鷺であるとされている。

伊達政宗以来、歴代の仙台藩主たちは教養人のたしなみとして和歌をはじめとする文化活動に力を注いできたのである。

鷺図を描いた宗村とは

伊達宗村は享保3年(1718)に吉村の4男として生まれ、幼名を勝千代丸といった。享保9年(1724)12月に總次郎久村(そうじろうひさむら)と称したが、享保16年(1731)に元服して、当時の将軍であった徳川吉宗公から偏諱(へんき)を賜り(将軍あるいは大名などが、家臣の功ある者あるいは元服の際などに名の一部を与えること)「宗村」と改め、従四位下侍従越前守(じゆしいのげじじゅうえちぜんのかみ)に任じられる。寛保3年(1743)には陸奥守となり、仙台藩の6代藩主となった。延享4年(1747)には従四位上(じゆしいのじょう)に叙せられ、左近衛権中將(さこのえのごんちゅうじょう)に任ぜられ、宝暦6年(1756)5月に宗村は39歳でこの世を去った。

宗村は、延享元年(1744)に藩主として初回国すると、24か条の条目を発して家臣の綱紀肅正(こうきしゆくせい)をはかり、財用方の役人に儉約を命じて放漫財政を戒め、この後毎年のように儉約令を出している。

藩の美術を支えた手前絵師—宗村の時代は

17世紀後半、江戸幕府が抱え絵師の制度を確立してからは、仙台藩でも抱え絵師の組織化を実施し、手前絵師と称して日常的な作事を中心に雇用していた。

享保19年(1734)、将軍家から伊達宗村の妻として興入れする利根姫(とねひめ)のために江戸にある中屋敷の御守殿が造営された際、江戸在住の狩野派画家である狩野探常や松本随川とともに活躍したのが、藩が独自に抱える「手前絵師」である松原探梁(まつはらたんりょう)・菊田栄羽(きくたえい)・荒川如慶(あらかわじよさい)の3名であった。手前絵師は定例の絵画制作や古画の模写や鑑定など制作の場と内容は多岐にわたっており、特に肖像画制作は重視されていた。肖像画制作は5代藩主吉村までの江戸狩野派に代わり、6代藩主宗村以降、手前絵師である菊田家を中心に起用されていくことになる。

学芸研究員 砂金 春奈
実習生 梶山 咲希

参考文献

祖田浩一(監修)、芳賀登、中嘉邦、一番ヶ瀬康子「日本女性人名辞典」日本図書センター 1993
仙台市史編さん委員会編「仙台市史 特別編 美術・工芸」仙台市 1996
仙台市史編さん委員会編「仙台市史 通史編5 近世3」仙台市 2004
内山淳一「国宝大崎八幡宮 仙台・江戸学叢書28 仙台藩の絵師たち」大崎八幡宮 2011

用語解説 詳しくはP26へ

*1 利根姫

学芸研究員の目



学芸研究員
砂金 春奈

作者の宗村は、仙台藩の家臣は浪費が多いようだと思っており、奢侈は貧窮の要因であると考え、儉約令を毎年のように出していたといえます。

特に宗村の代には、災害や凶作が頻発したこともあり、財政は窮乏し、藩主の身の回りも切り詰めて歳出減をはかったといわれています。

この資料のココがすごい!!

少ない色彩の中で、白鷺の美しさが際立ちます。

お気に入りポイント

シンプル故の美しさをご堪能ください。

■ 基本情報 ■ 作者：燕石斎薄墨(?~1834) ■ 年代：文政10年(1827)前後

■ 寸法：縦17.2cm 横13.0cm 厚さ0.2cm



仙台藩の民俗行事を 今に伝える「往来物」

往来物とは

『仙府年中往来』は、燕石斎薄墨(えんせきさいうすずみ)によって撰された「往来物」である。

往来物とは、平安末期から明治中期に至るまで初等教育の教科書、副読本として編まれた書物の総称である。本来は手紙文、特に往復書簡の模範文例集であったが、中世以降、作文のための短句・単語集や文案・文例集となり、書簡集形式をとらないものでも「往来」の名を称するものがあらわれる。近世に入ると、庶民教育機関としての寺子屋の普及と学習人口の増加によって、往来物の種類も出版部数も飛躍的に増加し、内容にも学習上の工夫が加えられ、多様化していく。

『仙府年中往来』について

本資料には、正月・七夕といった年中行事や、東照宮^{*1}・竹駒神社・塩竈神社等における祭礼が詳細に記されており、撰者の薄墨が城下のみではなく、つぶさに仙台領内の各地を巡見したことが伺える。

榴ヶ岡^{*2}の花見など現代に通じるものもあれば、なかにはまったく姿を消したものもあり、藩政時代における民俗行事を考える上でも非常に貴重である。特に、東照宮における例祭(仙台祭とも)では城下の町々を神輿が渡御し、山車が出されるなど荘重華麗な催しであったことが分かる。

また、当時の書体としては読みやすく、且つ振り仮名もあって、多くの人々に親しまれていたと考えられる。

文人・燕石斎薄墨

燕石斎薄墨は水戸生まれの文人で、文政元年(1818)に仙台の地に住み、著作活動を行った。また、仙台藩の御用板所であった「裳華房」の伊勢屋半右衛門(いせやはんえもん)と知遇を得て名を広めたことで知られる。代表作は『江戸道中往来』、『竹駒詣』、『塩竈詣』(『KOREMITE』VOL.1参照)、『金華山詣』、『平泉詣』などがある。

本作の冒頭部分に『和漢朗詠集』に所載されている慶滋保胤(よししげのやすたね 平安時代の文人)の漢詩が引用されており、薄墨が文学に精通していたことが伺える。

学芸研究員 熊谷 明希
実習生 白銀沙也佳

参考文献
吉岡 一男『「仙府年中往来」に見える「まつり」について』(『仙台郷土研究』15-1 1990)
仙台市史編さん委員編『仙台市史 通史編3 近世1』仙台市 2001
平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系 第4巻 宮城県の地名』平凡社 1987

用語解説 詳しくはP26へ

*1 東照宮
*2 榴ヶ岡

学芸研究員の



学芸研究員
熊谷 明希

『仙府年中往来』には藩政時代における、仙台領内の民俗行事が詳しく記されています。現代に通じるものもあり、まったく姿を消したものもあり、非常に興味深い資料です。

特に、東照宮における例祭では城下の町々を神輿が渡御し、山車が出されるなど荘重華麗な催しであったことが分かります。また、振り仮名もあって読みやすく、挿絵も豊富です。

この資料のここがすごい!!

藩政時代における、仙台領内の民俗行事が詳しく記されている!

お気に入りポイント

挿絵が豊富で振り仮名もあり、すごく読みやすい!

基本情報 ■時代：江戸時代 ■寸法：縦28.4cm 横20cm



この資料のココがすごい!!

本館収蔵の『奥州仙台萩』と同様、伊達騒動を扱った書物のうちのひとつ!

お気に入りポイント

くずし字がわかりやすく古文書に慣れていない人でも、読みやすい!!

学芸研究員の目



学芸研究員
佐藤 由浩

伊達騒動など藩や幕府のスキャンダルを題材にした作品は、数多くあります。こうした作品は、事実を踏まえ作者の解釈などが加えられています。当時の人々の興味関心を知ることのできる貴重な資料です。



仙台藩のお家騒動を題材にした書物

『伊達秘録』とは

『伊達秘録』は江戸時代前期における伊達家の御家騒動である伊達騒動について書かれた、**実録物**^{*1}というジャンルの書物である。本資料はその写本で全5冊ある。

伊達騒動は、黒田騒動、加賀騒動または仙石騒動とともに三大御家騒動と呼ばれるほど大きな騒動であった。仙台藩の騒動については実録物が多く書かれており、歌舞伎狂言『伽羅先代萩(めいばくせんだいはぎ)』や山本周五郎の小説『樞(もみ)ノ木は残った』等の有名な作品の題材にもなっている。

伊達騒動に関わる2つの事件

伊達騒動は、原田甲斐宗輔による伊達安芸宗重刃傷事件である寛文(かんぶん)事件を指すのが一般的である。しかし実際は、刃傷事件以前に起こった綱宗隠居事件を含めた騒動である。

最初の騒動は仙台藩3代藩主綱宗隠居事件といい、綱宗が遊興放蕩三昧であったため家臣と親族大名が連合し、幕府に綱宗の隠居と、嫡子でわずか2歳の亀千代(後の綱村)の家督相続を願い出た。その結果、幕府の命により綱宗は21歳で強制隠居させられ、4代藩主に亀千代が就任した。

2番目の騒動は寛文(かんぶん)事件といい、一般に伊達騒動と呼ばれるのは、この寛文事件を指す。綱宗の強制隠居後、幼藩主亀千代

の後見役である伊達宗勝^{*2}が実権を握り権勢を振るった。それに反発した、伊達安芸が宗勝派の専横を幕府に上訴した。こうして、伊達宗勝・原田甲斐と伊達安芸らが対立する形となった。

その結果、大老酒井忠清邸で原田甲斐によって引き起こされた伊達安芸刃傷事件にまで発展することとなった。この事件に対する責任を藩主綱村は問われなかった。

実際に責任を追及されたのは、首謀者である原田甲斐の一族や藩主の後見役であった伊達宗勝、田村宗良らであった。特に事件の中心人物であった原田甲斐の息子たちは切腹を命じられ、宗勝は高知藩主山内豊昌へお預けとなった。もう一方の後見役である田村宗良は責務を全うしなかったことに対する責任を追及され、閉門の処分となった。

学芸研究員 佐藤 由浩
実習生 山田 美咲

参考文献
菊田定郷『仙台人名大辞典』歴史図書社 1974
仙台市史編さん委員会編『仙台市史 通史編4 近世2』仙台市 2003

用語解説 詳しくはP26へ

*1 実録物
*2 伊達宗勝

福應寺毘沙門堂奉納 養蚕信仰絵馬

FUKUOUJIBISYAMONDOUHOUNOU
YOUSANSHINKOUEMA

基本情報 ■作者：不詳 ■時代：明治時代 ■寸法：①縦13.6cm 横19.4cm 厚さ0.7cm ②縦13.4cm 横18.4cm 厚さ0.9cm ③縦15.0cm 横20.84cm 厚さ1cm



この資料のココがすごい!!
国の重要有形民俗文化財「福應寺
毘沙門堂奉納養蚕信仰絵馬」と同
じ堂に奉納された3点の絵馬

お気に入りポイント
二匹のムカデが鳥居をくぐって祈
願に向かっていくモチーフは、この
資料群の定番です。



養蚕の成功祈願と倍返し

角田市福應寺毘沙門堂の奉納絵馬

東北学院大学博物館では、角田市福應寺毘沙門堂に奉納されたいわゆるムカデ絵馬を3点所蔵している。これは、現在国の重要有形民俗文化財に指定されている「福應寺毘沙門堂奉納養蚕信仰絵馬」（平成24年3月指定）と同様に毘沙門堂に奉納されたもので、文化財指定される前に学術研究資料として収集された。ムカデ絵馬は、養蚕の成功などを祈願して、養蚕の大敵であるネズミ除けのためにムカデを描いたもので、庶民の信仰の一端を知ることができる興味深い資料である。

角田市福應寺毘沙門堂の絵馬は「倍返し」という奉納の習俗によって、膨大な数が奉納された。奉納者はすでに奉納されている絵馬を借り受ける。その後養蚕成就が無事に達成したならば、お礼として新たに絵馬を一枚作り、借りたものと共に倍返しをする。こうして絵馬が倍になって増えていくのである。倍返しの習俗は快癒祈願や旅の安全を願うときなど、養蚕成就祈願特有のものではない。また奉納に用いられるものは、絵馬だけではなくわらじや賽銭など様々である。

なぜムカデを描くのか

養蚕は農家の現金収入源であったが、不安定なものだった。蚕の餌となる桑の不作、蚕の病気、ネズミによる食害などがその原因である。福應寺のある鳩原地区においては、毘沙門天の使いである「ムカデ」がネズミを追い払うものとして信仰されたが、県南地域には丸森町の「猫神」の石碑などもあり、ネズミが蚕や繭の中のサナギを食い荒す被害は切実な問題だったのである。

なぜムカデのモチーフが描かれたかについては、はっきりとした理由はわからない。地域で

は大きなムカデは独特な臭いがするため、ネズミは遠くにも臭いを嗅ぎ分けて近寄らないと言われている。そのためこの地域では、ムカデは蚕の守り神のような存在になったと考えられるのである。

ムカデと人間

ところで、本資料のように庶民がムカデを描いたり信仰したりする民俗は、どちらかといえば珍しいものといえる。この絵馬の興味深いところは、つがいのムカデが鳥居を目指して這っているモチーフに、奉納者自身が投影されているように見えるところであろう。つまり奉納絵馬に描かれたムカデは擬人化されているのである。

擬人化されたムカデというモチーフは、ムカデが登場する日本の説話や昔話を想起させる。俵藤太が近江の三上山のムカデを退治する功名譚や、狛師が山の主であるムカデの目を射て日光権現から狩の許可をもらう東北の狛師の縁起など、ムカデは神の化身や精霊として描かれる。また、「ムカデの使い」という昔話がある。ある時、虫たちが鍋を囲んで宴会をしていると、カマキリが急に腹を下した。モグラの医者を呼んでくる使いに指名されたムカデは、たくさんの足に草鞋を履くのに手間取ってしまう。結局、カブトムシが代わりに使いに走り、カマキリは事なきを得るというコミカルなストーリーである。

ムカデは、刺されると厄介な害虫であると同時に、擬人化して奉納絵馬に描かれるようなアンビバレントな存在である。本資料には、そうした人と自然との複雑な関係が見てとれる。

学芸員 加藤 幸治

学芸員の目

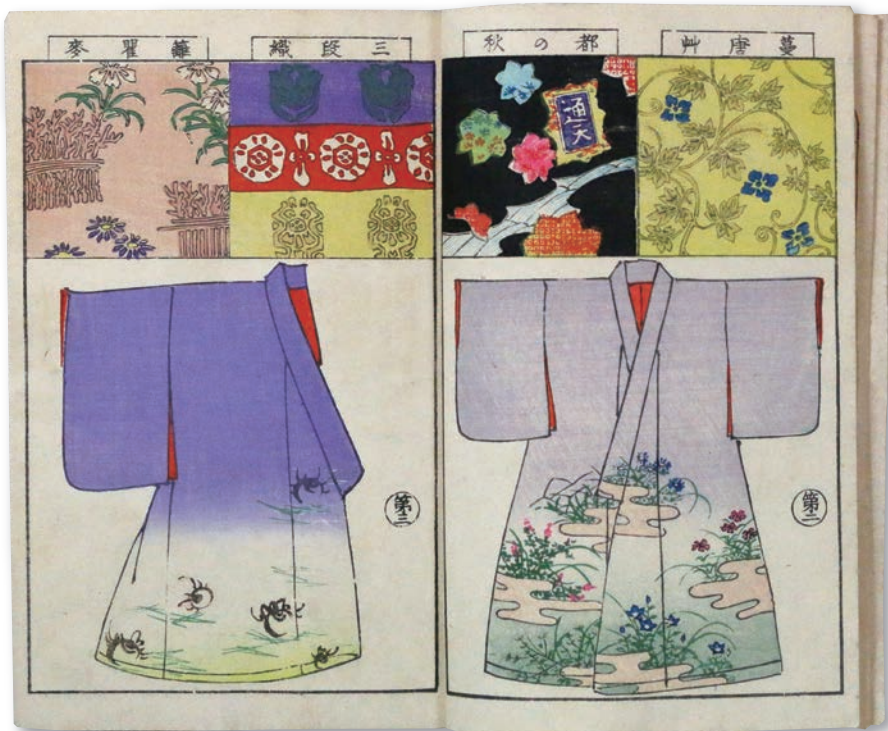


学芸員
加藤 幸治

宮城県の県南地域は、江戸末期から明治期にかけて養蚕がとても盛んでした。明治に入ると富岡製糸場に代表されるように機械化によって絹布の大量生産がはじまり、20世紀初頭に日本は世界一の生糸輸出国になりました。その原材料生産としての養蚕が全国的に広まり、そうした時代の庶民が養蚕の成功を願って奉納したのがムカデ絵馬でした。

基本情報 ■著者：浅井廣信(生没年不詳) ■年代：明治26年(1893)

■寸法：縦17.4cm 横12.0cm 厚さ1.0cm



版画による彩色豊かな着物の図案集

『模様美術便覧』について

本資料は、明治26年(1893)に浅井廣信が着物の図柄を彩色版画によってまとめたもので、発行者として山田直三郎、印刷者として鳥居又七が携わっている。

当時の日本では、活版印刷という西洋式の印刷技術が導入され普及していたところであったが、この『模様美術便覧』では版画の手法を採用し、着物の図柄を描いている。また本書には、50種の着物図のほかに100種の模様が1頁につき2種ずつ掲載されており、模様については「蔓唐草」「都の秋」「三段織」「籬瞿麥」というようにひとつひとつ名称が書き添えられている。

さらに、写真には掲載されていないが、とびらには「意匠斬新」と大きく書かれた言葉があり、頁を繰ると鐵齋散人という名と「鉄道人」の落款印(らっかんいん)があることから、これを書き添えた人物は富岡鉄齋^{*1}であることがわかる。

『模様美術便覧』に携わった人びと

○著者：浅井廣信

本資料の著者である浅井廣信については史料が少なく、その詳細な生涯などを知ることは困難である。

しかし浅井は、『模様美術便覧』のほかにも多くの図案画譜を著しており、『京都名所案内記(上下巻)』、『新案模様集』、『京都祇園図

会』、『京都名所図会』、『京都市街名勝案内新圖』、『京都府管内全図』など多くの作品が挙げられる。

○発行者：山田直三郎

発行者である山田直三郎は、明治24年(1891)に田中文求堂より独立し、「山田芸艸堂(うんそうどう)」の名で図案画譜の出版を始めた。なお、この「山田芸艸堂」という屋号は富岡鉄齋による命名である。現在山田芸艸堂は、「美術書出版 株式会社 芸艸堂」の名で日本唯一の木版本出版社として、観賞用木版画および木版本を手掛けている。

○印刷者：鳥居又七

印刷者の鳥居又七については史料が少なく詳しい生涯などは不明であるが、現在の「西湖堂印刷」である「鳥居西湖堂印刷所」を創設した人物であるとされる。

学芸研究員 真柄 侑
実習生 玉虫 麗美

学芸研究員の目



学芸研究員
真柄 侑

写真の右ページにある唐草(唐草)模様は、中国から伝来した蔓草(つるくさ)模様としてとらえられてきましたが、実は文様そのものは、古代オリエントやギリシャなどに起源を持つものです。シルクロードを経て中国を経由する間に、唐代に全盛を迎えた唐草文様と融合して、日本へと伝わったと考えられています。時代を経て、唐草は牡丹や蓮などほかの花々と組合せながら、日本人に愛されるモチーフのひとつとなりました。特に江戸時代後半には、縁起の良い柄として風呂敷の模様に使われることもしばしば。本資料でも、唐草模様はパターンを変えて何度も登場しています。一つの模様が異国からの長い旅路に思いが馳せられます。

この資料のココがすごい!!

50種の着物図と100種の模様すべてに丁寧な色彩。風景画のような着物の模様も細部まで丁寧に描きこまれています。

お気に入りポイント

どのページも色鮮やかで、ファッション雑誌を見ている気分!袖を通してみたくなるデザインばかりです。

参考文献
新潮社辞典編集部『新潮日本人名辞典』新潮社 1991
杉原夷山編『日本書画落款印譜集成』柏書房株式会社 2003
並木誠士『すぐわかる日本の伝統模様-名品で楽しむ文様の文化-』東京美術 2007
木版画 版元芸艸堂 Woodblockprint UNSODO
<http://www.hanga.co.jp/> 2017年1月現在

用語解説 詳しくはP26へ

*1 富岡鉄齋

基本情報 ■作者：佐久間鉄園(1850～1921) ■時代：明治～大正時代

■寸法：縦199.0cm 横43.8cm

この資料のココがすごい!!

掛軸に描かれた鍾馗は、悪神を追い返す強力な神様としてみられ、鍾馗の画像を飾る呪法が行われてきた。本資料を飾れば、厄災から身を守ってくれるかも!

お気に入りポイント

作者の佐久間鉄園は鍾馗を彩色せず、黒の肥瘦・濃淡を使い分けて描いています。髭や衣冠など濃淡をつけて描き、描線は長く流れるように力強いです。強い者の権化・象徴とされる鍾馗の威風が伝わってくるような作品。



学芸研究員
安 保 智

学芸研究員の目

鍾馗を厄除けの守り神とみる信仰は、中国の故事に基づいています。佐久間鉄園は東洋絵画の源流地である中国を自分の眼で確かめるため、中国各地を周遊し、画法を研究したようで、中国の有名画家の伝記や代表作の論評も集めていました。鉄園は、明治期の西洋美術の導入に対して保守的な立場を自認し、日本画の伝統を重んじて、東洋絵画の古い画題を好んだ人物として知られます。鉄園の画家としての人生に大きな影響を与えた中国歴遊の経験が本作品にも生かされているのでしょうか。



「こどもの日」に現れる 厄除けの神様

鍾馗とは

鍾馗(しょうき)は、中国の疫病除けの守り神で、長い髭を蓄え、大きな目で何かを睨み付けている姿が印象的である。中国では故事にならない、古くから「端午の節句」に鍾馗を描いた黄色の紙を家の門前に貼って魔除けにしていた。その風習は日本にも伝わり、「こどもの日」には、のぼりに描かれ、五月人形として登場するなど馴染みが深い。江戸時代中期以降、諸画家が題材として取り上げることが多くなり、狩野探幽や富岡鉄斎の鍾馗図が有名である。

佐久間鉄園の人生

本作品は、嘉永3年(1850)に仙台藩で生まれた佐久間鉄園(さくま てつえん)の作である。鉄園は、仙台藩の御用絵師であった晴岳(せいがく)の子で、幼い頃から父の下で絵を描き、その才能を発揮して将来を嘱望されていた。しかし、鉄園が成年を迎えたとき、明治維新によって藩制度は崩壊し、仙台藩に仕えた人々は家禄を失って、佐久間家は絵師としての生活が成立しなくなる。それに加えて、鉄園の画風は明治政府の官吏らが好む南画風ではなく、狩野派の正統を受け継いだ北宋風であった。鉄園は画家の道を諦めて、政治家の道を志したが、薩長政権下で東北出身者が活躍する場はなく、函館で新聞記者としての生活を送る。後に父と兄得楼が亡くなり、仙台

藩画員であった佐久間家が凋落してしまったように思われたとき、竜池会(後の**日本美術協会**^{*1})に所属する狩野派の下條桂谷(げじょうけいこく)との出会いを契機に、画家として再出発を果たす。鉄園は、明治維新後の極端な西洋美術の導入に対し、日本固有の美術の復興を目指していた竜池会の活動を支持し、自らその展示会に出品を行うようになると、次第に実力を認められていった。後に鉄園は**文展**^{*2}の審査員に選出され、日本美術協会の元老的な存在として影響力を強めていく。

仙台藩最後の御用絵師の末裔として近代初頭を生きた鉄園は、時代が流れて社会が変質していくなかで、紆余曲折を経て画家として活躍した苦勞人である。鉄園の地元である仙台には、彼の作品が多く残されており、鉄園が亡くなった後も、仙台の人びとが彼の作品を愛し続けていることを物語っている。

学芸研究員 安保 智
実習生 大友 りん

参考文献
仙台市史編さん委員会編「仙台市史 特別編3 美術工芸」仙台市 1996
仙台市史編さん委員会編「仙台市史 通史編6 近代1」仙台市 2008

用語解説 詳しくはP27へ

*1 日本美術協会
*2 文展

基本情報 ■作者：遠藤速雄(1866~1915) ■時代：明治~大正時代

■寸法：縦195cm 横60cm



この資料のココがすごい!!

人物の衣装や家具など、細かいところまで丁寧に書き込まれていて質感をよく表しています。一方、少し淡く描かれた山々と滝は、見事に中国の景観を連想させます。

お気に入りポイント

今にも動き出しそうな人物、山を落ちる滝の音が聞こえてきそうな作品です。



学芸研究員
遠藤 健悟

学芸研究員の目

実際には見たこともない中国の人物や風景を美しく描き、吉祥を寿ぐ本作の性格をよくあらわしています。『仙台市史』によれば、宮城県に戻ってきた速雄は山河に分け入り、風景を写生したとされます。本作品は、模写や粉本をもとに制作されたとはいえ、作者が日本の山河をよく観察し、描いてきたからこそ人の目を惹く作品になったのかもしれない。



的確な描写と 高度な筆法をもちいた作品

宮城県を代表する日本画家

本作品は、宮城県の日本画家である遠藤速雄(えんどうはやお)によって明治から大正時代に描かれた書画である。

作者の遠藤速雄は、幕末に活躍した伊達家の重臣である遠藤允信(えんどうよしのぶ)の次男として生まれた。明治9年(1876)速雄が11歳のとき、京都平野神社宮司となった父と共に京都へ移り、原在中に始まる原家の四代目原在泉(はらざいせん)に画を学んだ。17歳の頃には、「第一回内国絵画共進会」に作品を出品、入選したことをはじめとして様々な展覧会で賞を得ている。明治24年(1891)には郷里であった宮城県仙台に戻ったが、山水、花鳥、走獣、人物などを画題として様々な作品を描いている。特に、郷土の山河を題材にした作品は、高度な技術と的確な対象描写に特徴がある。また、速雄は「名所絵」^{*2}を得意とし、「宮城十二景」など四季を軸として郷土の諸名所の典型的景観をとりだし一堂に並べて描く作品を描いている。当時の仙台において、京都で本格的に学んだ画人は少なく、速雄の作品は仙台の画壇に新たな風を送り込んだ。

なお、代表作としては「花に寄する故事」「仙南仙北十二景図」^{*1}などがあり、明治31年(1898)に組織された仙台書画会の代表的人物としても有名である。

本作品について

この書画には唐時代の母娘と思わしき姿が描かれている。両者ともにたおやかな衣服を纏い同じ柄の布で髪を結びあげており、その出で立ちは日本の着物とは異なっている。また、背景の山々と滝は中国の山水画を連想させる。緻密に描かれた人物や花や家具などに対して、背景は水気を含ませ淡く描かれており、折衷的な技法を用いた速雄の特徴が表れている。ただし、唐美人をモチーフに描かれた作品は多くあるが、本作品に関しても当時速雄が直接見て書いたものではないと考えられ、粉本をもとに描かれたものだろうと推測される。

外箱には「遠藤速雄先生」の文字がある。そのため、この書画は作者が一定の日本画家としての地位を確立した以降のものと考えられる。

学芸研究員 遠藤 健悟
実習生 柴田 麻有

参考文献

石田尚豊ほか監修「日本美術史辞典」平凡社 1987
河北新報社編「宮城県百科事典」河北新報社 1982
仙台市史編さん委員会編「仙台市史 特別編 美術工芸」仙台市 1996
辻惟雄「日本美術の歴史」東京大学出版会 2005
宮城県編「宮城県史13(美術建築)」宮城県史刊行会 1980

用語解説 詳しくはP27へ▶

*1 原家
*2 名所絵

基本情報 ■ 編者：不詳 ■ 年代：昭和24年(1949) ■ 寸法：縦24.4cm

横18.4cm 厚さ3.2cm



この資料のココがすごい!!

作者それぞれの描き方の違いを見比べてみてください!!

お気に入りポイント

四季折々の作品が見られると共に、様々な作者の絵が楽しめる!

学芸研究員
相川ひとみ

学芸研究員の目

明治から大正時代にかけての日本の美術教育というものは、自由に絵を描くといったものではありませんでした。手本に沿って描いていくという臨画が一般的で、筆使いまでも手本通りに模写するというのがこの時代の美術教育の特徴です。『千紫萬紅』は、このような臨画の手法をとる際の絵手本として用いられたものです。そのため、筆使いや色彩、構図が様々な作品が10点集められました。当時は手本を見ながら模写することで、絵を描く技術を磨いていったと考えられています。



四季折々の風情を楽しむ絵画集

『千紫萬紅』とは

『千紫萬紅』とは、その表題のとおり、四季折々の様々な花や風景の絵画が10点収録されている画帖(画集)である。10点とも作者、題材が異なっている複数人による共同制作によるものである。

本作の形態は絵を集めた折^{*1}り本である画帖(がじょう)となっている。折り本は、卷子本のマイナス面である繙読(はんどく)の不便を解消するものである。先頭の部分と最後の部分に丈夫な表紙が取り付けられ、帖装本(じょうそうぼん)と呼ぶこともあり、本作も表紙の厚紙に布が貼られているため、帖装本の形式を取っている画帖であることが分かる。

本資料の編者とテーマ

編者については、記載がないため不明。各作品の作者についても、同様、資料不足のため不明。また、本書にはカバーがあり、カバーの表題は『千紫萬紅』であるが、画帖本体の表題は「怡情幀(いじょうちやう)」と名前が異なり、題を定めた人物もカバーは馨、印章は香亭で、本体は大□、印章は2つ並んでいるのが潰れているため不明だが、別の人物であることが読み取れる。

収録されている作品は、春の紅白梅、川と鳥、夏の山、山と川、竹と鳥、冬の富士、雪降る家、秋をテーマにした3点の合計10点である。

秋をテーマとした作品

本資料の中に、秋をテーマとして描かれた柿とメジロの絵画がある。この作品は『千紫萬紅』の表題を定めた香亭と同人物が描いた作品である。熟れた柿の橙色の色鮮やかな様と、丸みを帯びたメジロの愛くるしい姿が一つの作品の中に収まっている。秋の豊穡を表わすような趣のある作品である。

この画帖の中で秋を描いた作品は、柿とメジロの他に、毬栗(いがぐり)、秋の風景の3点である。柿とメジロはメジロが柿を啄ばもうとした一瞬をアップで捉えた作品、毬栗は膨らんだ栗が毬から零れ落ちる様子を描いた作品であるのに対し、秋の風景は遠くに見える山々と川、そして手前の紅葉をも場面に入れ込んだ、秋の風景を切り取った一枚である。同じ季節であっても、異なった視点からその季節を描き、日本の四季折々の長閑な美しさを味わうことができる画帖である。本体の表題「怡情幀」の怡は、訓読みでよろこぶと読み、心がなごむ、打ちつけて喜び楽しむという意味を持つ。『千紫萬紅』の自然の美しさを感じることを喜びと思えるような画帖であるということを表したかったのかもしれない。

学芸研究員 相川ひとみ
実習生 渡邊 千明

用語解説 詳しくはP27へ

*1 折り本

用語解説

P2 伊達吉村領知朱印状

*1 桃生郡中津山村

桃生郡中津山村は現在の石巻市桃生町にあたる。同村は北上川左岸に位置し、気仙道に沿う南北に長い大村である。近世初頭の北上川改修により、活発に新田開発が進められた。ちなみに端郷の一つ新田は近世初頭の近田開発で成立している。ほかにも気仙道の宿の神取や鮭の名産地である高須賀も端郷である。また、この地域は桃生郡北方20ヵ村大肝入が支配した。

「正保郷帳」によると田78貫154文、畑19貫259文で水損・旱損と注記があり、他に新田421貫803文と記されている。

P8 伊達吉村領知朱印状

*1 地方知行制

家臣に直接知行地として土地を給付し、そこから入る年貢を家臣の収入とする制度。知行地を支配し、自分の責任で年貢を取る藩士を給人といった。ただし、仙台藩は地方知行制を採用していたが、切米や扶持米として直接藩から貨幣や米を支給されていた者も多かった。

仙台藩の地方知行制の特徴は、知行地を与えられた家臣の多くが知行地内に在郷屋敷を持っていたことである。在郷屋敷は年貢を免除されており、財政の助けになったと考えられている。

P10 鷲岡

*1 利根姫

仙台藩6代藩主伊達宗村の妻。和歌山藩主徳川宗直の娘。享保2年(1717)生まれ。

享保20年(1735)4月に8代将軍吉宗の養女となり、同月27日に宗村と縁組し、11月28日、御守殿へ入興した。宗村との間に女兒2人をもうけるが、延享2年(1745)、病で没死。仙台大年寺に葬られる。

P12 仙府年中往来

*1 東照宮

現在の仙台市東照宮一丁目に鎮座し、徳川家康を祭神とする旧県社。承応3年(1654)に完成。本来は天神社を祀っていたが、3代将軍徳川家光により東照宮の勧請が許可されると、2代藩主忠宗は天神社を当地の東に移し、跡地に東照宮を造営した。日光東照宮を意識した壮麗な建築物であったがその権現造とは構造が違い、拝殿と本殿が別棟に建てられ、本殿の周囲には瑞籬をめぐらし、正門には唐門を配するという手法で、政宗の廟瑞鳳(ずいほう)殿と同様式である。社殿のうち拝殿・神饌所は昭和10年(1935)の火災で焼失したが、本殿・唐門・隨身門・透塼・石鳥居は

国指定重要文化財。旧暦9月17日に行なわれる例祭(後に4月17日)は「仙台祭」とも称され、神輿が城下の町々を渡御し、藩主在国の時は城下町から山車が出されるなど、豪華華麗なものであった。

*2 榴ヶ岡

宮城県仙台市宮城野区榴ヶ岡にある丘陵で、古くから歌枕に詠まれたつつじの名所。「躑躅岡」と書き、つつじのおかとも読む。元禄8年(1695)4代藩主伊達綱村により、当地に生母浄眼院(三沢初子)のため釈迦堂が建立された。その際に馬場・弓場の設置や、桜の植樹が行われ、行楽地として賑うようになる。明治以降、歩兵第4連隊の敷地となり、第2次世界大戦の敗戦まで仙台における軍事上の要地であった。戦後、榴ヶ岡総合公園として整備が進み、歴史民俗資料館、隣接の宮城県図書館ほか宮城野原公園総合運動場などと併せ、仙台市の文教地区の一つとなっている。

P14 伊達秘録写本

*1 実録物

江戸時代の小説の種類の1つで実在の事件をもとに実名を用いつつ虚実を交えた長編読み物。将軍家や幕府の内情や大名の御家騒動を扱うため禁書になったが、宝暦年間(1751-64)に写本や講談で流布していく。種類には将軍家の御記録・軍談・捌き(裁判)物・仇討物・任侠物・騒動物などがある。その中でも特に三河風土記、伊達騒動、大岡政談などが流行し、演劇や小説の素材となった。

*2 伊達宗勝

伊達政宗の十男として元和7年(1621)に生まれる。一関藩藩主。綱宗の隠居と亀千代(綱村)相続を幕府に上申した人物のうちのひとり。綱宗の逼塞(ひっそく)後、岩沼藩主田村宗良と共に綱村の後見人となり、1万5800石から3万石に増加される。

寛文11年(1671)に伊達宗重の上訴と原田甲斐による刃傷事件の責任を問われ、高知藩主山内豊昌へお預けとなった。延宝6年(1678)12月に死去し、土佐長岡郡(高知県高知市)にある吸江寺に葬られた。

P18 模様美術便覧

*1 富岡鉄角

天保7年(1836)に京都の法衣商十一屋伝兵衛の次男として生まれた、明治・大正期の日本画家である。本名は猷輔(ゆうすけ)のち百鍊。字(あざな)は無倦(むけん)、別号は祐輔・鉄屋・鉄道人。国学・漢学を修めたのちは、南画や大和絵を学んだ。文久2年(1862)は京都聖護院村に私塾を開く。維新後、大和石上神社、和泉大鳥神社などの宮司となり神社復興に尽くすも明治14年(1881)に辞す。その後、明治27

年(1894)より京都市美術工芸学校で教えるが、明治37年(1904)に退職した後は、儒者としての姿勢を貫きながら自由な作画活動を展開した。大正13年(1924)没。作品に『旧蝦夷風俗画』(明治29)、『安倍仲磨明州望月図』(大正3)などが挙げられる。

P20 鍾馗様

*1 日本美術協会

明治~昭初期の美術団体。明治12年(1879)、佐野常民・九鬼隆一・下條桂谷らにより、東京における日本画壇の最初の団体として竜池会(日本美術協会の前身)が結成。日本美術の伝統擁護や伝統美術の再認識などが目的で、西洋美術の導入に対して、保守的傾向が強かった。明治20年(1887)に会名を日本美術協会と改称。毎年春秋、日本画・彫刻・工芸・書を含む展覧会を開催し、最大規模の美術団体として活動した。しかし、日本美術協会は保守的な立場を取り続け、日本画の革新を目指す勢力から旧派・協会派と称され、文展・院展などの開催により、新鋭画家らの活躍の場が増えると、次第に影響力を弱めていく。戦後、日本画各団体に委員を委嘱して、日本画全体の総合的展覧会に変更した。

*2 文展

文部省美術展覧会の略称。フランスのサロンにならい、文部省が主催した美術展とその運営組織。明治中ごろ、美術運動が盛んになり、日本美術と洋風美術、新旧諸派が対立する美術界に共通の場を与え、その振興を図ることが目的。明治40年(1907)10月より毎年秋に開催された最初の官展であり、日本画・洋画・彫刻の三部構成。文展は流派や美術団体の垣根を越えた美術界の統合を目指して、各派が一堂に競う場として機能し、新人の登竜門として重要な役割を果たした。しかし、審査委員の人選や受賞作品の選考をめぐる紛争が絶えなかった。さらに官僚的な運営やアカデミズムの権威をまもって新鋭の登場を拒む弊害も生じ、機構制度の変更を重ねることになる。大正8年(1919)に廃止されるが、昭和12年(1937)、再編して文展(新文展)が復活し、昭和19年(1944)まで開催。戦後、廃止の道を辿るが、官展の伝統は日本美術展覧会に継承された。

P22 唐美人之図

*1 原家

京都の原在中を祖とし、原派とも呼ばれる画風を確立した。在中は、鹿野派の画家・石田幽汀に学び、同門で写実的な再現を特徴とする円山応挙の影響を受けつつ中国画、明画を模写した。さらに、土佐派の大和絵も学んだとされる。その後、実力を認められ宮中絵師となる。原在中は、それまで学んだ様々なスタイルや技法をひとつの作品のなかで、融和・混在させると

いうスタイルを確立した。

*2 名所絵

もともとは、歌枕など諸国の名所を選び、連作として屏風画や障子画として描いたもの。四季絵とともに、日本の風景・風俗を描いた大和絵の主要なジャンルをなした。特に名所絵にあつては、画題となった名所はすでに広く歌に詠みつけられ、その伝統的イメージに従って描かれ、実在の景物とはかかわりを持たなかった。そして春日野といえは若菜摘というように、名所と特定の景物、さらには年中行事や四季の観念が付与され、それらが分かち難く結び合い、生彩に富んだ絵画イメージとして定着していった。

特に、鎌倉時代に伊勢で制作された「伊勢新名所歌合戦巻」は有名であるが、当時制作された名所絵の情景は平安以来の現実からかけ離れた観念イメージとして描かれている。

現地の風物を実際の観察に基づいてそのまま描き出した名所絵は、中世末から近世初めの京名所扇面画や、洛中洛外図屏風の盛行、さらには近世中期以降の実用的な名所絵がそれにあたる。

P24 千紫萬紅

*1 折り本

折り本とは、和本の種類のうちでも古いものの一つで、長く継ぎ合わせた紙葉を一定の幅で折りたたんだものである。糸を用いて綴じる製本方法ではないため、この方法を用いると綴じ目がなくなる。卷子本(かんずばん)と違い、どの部分でも簡単に開いて見ることが出来る点が特徴である。経本仕立てとも言われ、現在も経典や絵巻物などに使われている。

博物館実習の様子を見てみよう!!

今年度は移動博物館活動の一環として、ミュージアムキッズ! (主催:こども☆ひかりプロジェクト)、ミュージアムユニバース(主催:仙台・宮城ミュージアムアライアンス)に参加しました。ここでは、イベントに出展するまでの行程を紹介します。

1 企画

実習生が2グループに分かれて、それぞれ企画を考えました。昔の遊びをアレンジして、今の子どもたちに楽しんでもらおうというコンセプトで、全体の企画名は「ASOBIの達人」としました。Aグループはとんとん相撲を、Bグループは射的を元に新しいゲームを考案し、どちらもゲームで使うお相撲さんや鉄砲を自由にカスタマイズできるようにしました。ゲームに必要なものを挙げ、予算の中で準備します。



2 製作

ゲームを行なうステージや小道具、景品の製作と、当日子どもたちに作ってもらう作品の試作をします。また、自分たちでも実際に遊んでみて、誤作動はないか、危険がないかを確認します。この作業の中で新たにアイデアが生まれ、それが活かされることも。



とんとん相撲の試作品

3 本番!

イベントはおかげさまで大盛況! 当日は予想以上に大勢の子どもたちが遊びに来てくれました。現場では事前に決めていた役割分担だけにとらわれず、臨機応変に対応する力が求められます。自分たちでは思いつかないような、子どもたちの自由な発想に驚かされました。





このご婦人は...?



お好きな柄は?



四季折々
絵の手本

KOREMITE
考古学 歴史学 民俗学 展示

— 東北学院大学博物館 収蔵資料図録 — **VOL.2**

編集・発行 東北学院大学博物館

発行日 2017年3月1日

〒980-8511 宮城県仙台市青葉区土樋一丁目3-1

TEL : 022-264-6920

<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/facilities/museum/>